
墮天使は男の娘

七夜 泰星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮天使は男の娘

【Nコード】

N5071T

【作者名】

七夜 泰星

【あらすじ】

貧乏男子高校生、世浪よなみ 樫れきはお嬢様、お坊ちゃん高校に女子高生として入学することになった。いわゆる、「女装男子」や「男の娘」というものにあてはまる。

そこで美少年との出会いが大きく運命を変える。

その美少年は実は・・・

ボーイズラブではありません。

プロローグ

今日から俺は男子高生・・・っていうはずだったんだが、今日から俺は女子高生。

好きでなった訳じゃない。しかも、共学。お嬢様とお坊ちゃまのよう学校なんて、貧乏のウチが通えるわけもない。

女が嫌いだ・・・

入った理由なんて、ウチは学費が払えない。

だったら安い県立いきやあいいじゃん、ってな。

それさえも、厳しいんだよ。そこで見つけたのが、この学校。

妹の雑誌がリビングに開いてあった。

ふと見たら、

『私立蘭華峰学園に入りませんか？ごく平凡な生活をしている君！
無料でお嬢様高校に通いませんか？
条件』

女子であること

高校入試を受けていない人

以上のことが条件です。興味のある方はぜひお電話ください。応募も電話でお願いします。受かるのはたった一人です。

応募用電話番号 XX - XXXXX - XXXX

お問い合わせ電話番号 00 - 00000 - 00000』

俺は早速電話をした。女子の声で。

「あの、雑誌の広告を見ました。」

あっちがわの人は

「お名前をお願いします。」

「世浪麗輝と申します。」

「かしこまりました。決まった場合、お電話します。」

「すみません、決まる基準はなんですか？」

「この電話の礼儀です。礼儀は基本中の基本ですから。」

あのときは、さすがお嬢様高校って思った。

「あ、ありがとうございます。」

と緊張義気でも自身はあった。

理由なんて、簡単だ。

高校入試を受けてないヤツだんてお嬢様高校の豪華さにつられてギヤルとかが集まるだろ？礼儀まで気にする訳ないから、

「あゝのゝ。雑誌みたんスけど。ウチ、高校受験受けてない系なんでえゝ。ぶつちやけ？無料なら通いたいなゝって？」

とか言うかな、って。

あとはあれだな、高校入試を受けてないってやつあ、そういないって。俺みたいな事情はあったとしてもな。

電話をかけた3日後、電話がかかってきた。予想どおりに。

「世浪さんですか？」

緊張しながらも、この間の声で

「は……い。」

といった。

「蘭華峰高校の者ですが、この間のお電話の結果、一人はあなたに決まりました。」

当たり前、と思いながらも

「ほっ本当ですか！？ありがとうございます！で、なんで私に決まったんですか？」

と聞いてみた。

「まず、高校入試を受けていない人が少ないですよ。それが一番おおきいでしょうけど、この間も申したように、礼儀があなたが一番よかったですね。」

笑ながら言った。

「約束道理、学費はもちろん、制服もこちらで免除いたしましょう。寮はどうなさいますか？」

「寮も無料なら、お願いします。」

ここから、蘭華峰までは3時間くらいかかる。ルームメイトが女だらうと関係ない。

「かしこまりました。一人部屋をご希望ですか？」

即答した。

「はい、お願いします。あと、もう一つお伺いしたいのですが・・・

」

「なんででしょう？」

「なんで、募集なんてしたのですか？」

「ああ、この学校に通いたくても通えない生徒がたくさんいるでしょう。その生徒の願いを一人でも叶えるためにです。あと、校長が『庶民がこの学校に入ったらどうなるかね。女の子1人くらいは夢を見させてやりたいな』とおっしゃっていました。」

なんで、女なんだよ。

「なんで、女子だけなのですか？」

「女子がちょうど1人たりなかったもので・・・同じ人数にしたいというのが校長のお考えなのでは？」

「いろいろありがとうございました。」

と言って俺は電話を切った。

ということがあって、春休み中に買った女物の服やらアクセサリやらをバックにつめて出かける。

数日前届いた蘭華峰学園の制服を着て明るめの茶髪で、おろしてすこしだけ高い位置で二つに結んでいるという感じた。

蘭華峰学園の制服はブレザーで白と紅色。ブレザーが紅色でシャツが淡いピンク。リボンかネクタイは女子は選べる。一応2つもっている。スカートがフリルというか、一応制服には見えてチエツク柄なのだが、ひらひらしている。スカートは赤と深い赤と黒のチエツク。靴下は好きなもの。髪型やアクセサリも好きなもので規定はないらしい。

親はこのことをしらない。

俺はもともと妹と2人暮らしとっていいほど、親が帰ってこない妹には、「高校決まったから。3日後からいないよ。寮に住むから3日後は早く出るから、寝てる。」

妹は1日中泣いていた。俺は妹が嫌いだったが、そのときはなぜか恋しく感じた。

そして今、蘭華峰学園の校門にいる。

とても大きい学校だ。

とてもどころではない。

やべえよ。

一般庶民にはやばいよ、これ。

なんていうか・・・下手したらバチカン市国くらいあるんじゃないの!?

ほら、そこ!そのビラ配りの人みたいに立ってるやつ!

何を配ってるかとおもったら、地図だよ!なんだよ、この学校・・・

これ、移動するのに何分かかんだよ!

あゝもう、とんでもないとこ来ちゃったな。

「あの人、かつこよくない?」

とかいろんな女子が見ている注目の男子は、俺がかぶっているカツラよりも深い茶色だった。どっちかというと、かつこいいというより美少年だった。

入学式があと少しではじまる。

先ほどの美少年は早速注目の的だ。

一人できてるのか？

その爽やかでかわいらしい彼の要旨には女子はもちろん、男子も一目置いてしまっただろう。

美少年とはいっても、外国の顔ではない。

あきらかに純粋な日本人の顔とっていい。

だが、どこかが輝いている。

目はでかいとは言えないが、大きくてぱっちりしている。

長い睫はぱちぱちと瞬きと同時におりる。

その深い茶色の短い髪はさらつとしている。

すらつとした体系は、そこまで男前とは言えない。

か弱いといったほうがあっている。

身長は俺と同じくらい。

女子にしては高い、男子にしては平均的な感じの身長だ。

俺のまわりはみんな俺と同じでかい鞆を持っている。

違うのは俺はスポーツブランドの安めの鞆。

皆様は高級ブランドのお鞆。

グッチ、コーチ、は当たり前。ルイヴィトンやシャネルなんか、なおさら見る。

この光景は、あれだろう。

グッチ、コーチは一般の人だつて東京に出ればいるさ。

ルイヴィトンも満員電車の1車両に財布を持っている人くらい数人はいるが、鞆はあまり見ない。

シャネルなんか池袋にいけばそこそこはいるのだろうが。

グッチやコーチよりルイヴィトンやシャネルのバックをもっている人のほうが多いこの空気。
あんまり、ないよな。

一年生の校章は銅。

ふつう、学年があがることには学年カラーというものは変わらないのだが。

この学校はかわるらしい。

そして、校章が銅の生徒についていく。

ここ、体育館か？

普通の2倍はあるんじゃないか？

となるとグラウンドはどうなるのか。

さらについていくと、クラスの名簿がでっかく張られていた。人を避けて前まで行った。

A組B組C組D組E組F組G組の7クラスがあった。

そのうち、俺はB組だった。クラス人数はそれぞれのクラス40人ほど。男女20人。

出席番号は、『よ』からはじまるからもちろん最後のほう。

小学校のころからそうだが、一番最後だった。

体育館に並べられた席に座る。

たまたま見た椅子の背もたれの裏には、『M a d e i n I t a

l y . . . ?

イタリア産かい！

パイプいすじゃない！

なんか、ピアノの椅子のような。

テレビはきつと、ハイヴィジョンでかなりでかく、その前にはソファがおいてある。パソコン、本棚、机、椅子。これはリビングだな。ほんのリビングなんだよな？

執事が口を開いた。

「こちらがバスルームです。」
なんとも洋風なことですこと。

これ、テレビでみたわ。うちの庶民以下のちいさいテレビで。風呂とシャワーが一緒なの。そんで、風呂の隣には洗面所。トイレもついている。風呂は一般的にはでかいな。倍はあるんじゃないか？洗面所がうちのリビングよりも広い。いや、家より広いといってもいいんじゃないかな。

次に執事に案内されたのがベッドルーム。
ダブルベッドが2つ分くらいの大きさであるの、なんていうか幕みたいな。

お姫様とかが寝るときにたらすあれ。

あれもついている。

そこにはドレッサーもたくさんあり、鏡もあった。

化粧台もあり・・・

なんていうか、とにかく女子にはたまらないスペースだと、男子が見てもそう思った。

というか、こんなに服買ってないよ。

次にベランダ。

ベランダ、というか庭か。

植物がけっこうあって、机とイスもある。

小さいといってもベランダといっていいのか。

ミニ噴水まであるよ？

おかしいよね。

ああ、なんか、天から堕ちてきた天使みたいな気分だ。
というのは、まったく別の世界で暮らすってことだよ。

無論、俺は携帯をもっていない。

パソコンあるし、別にかまわねえよ。

・・・

ふと見た見た制服のぴろぴろ。

タグ？

そこには、おきまりの

M a d e I n U n i t e d K i n g d o m

「ユナイテッドきんぐどん？」

一人でぶつぶつしゃべっていた。

「あ、キングダムか。」

なんだろう。ユナイテッドキングダム。

聞くのは恥ずかしい。

美少年（前書き）

七夜（作者）は世界の女装男子、男装女子を応援します。

美少年

執事とメイドが消えるとベランダにでた。

普通のマンションのように隣同士は見える。

雨戸のように区切れるが、別にまずいこともないので開けておこう。
片方のお隣さんはしめていて、片方はあいている。

ガラガラ。

人がでてきた。

それは、あの美少年だった。

「こんにちは。」

彼は爽やかにほほ笑む。

俺は無反応にお辞儀をした。

「お名前は？」はん

優しく甘くて透き通った声が静かに響く

「世浪 麗輝といます。」

また、彼はほほ笑んで

「世浪さんか。」

聞きづらいながらも、思い切って名前も聞いてみた。

「あのお名前……お名前……は？」

「ああ、俺は羽雪羅音^{はねゆきらい}。1年B組の。」

B組といえば、俺のクラスか。

「あ！お……私もそうです！」

やべ、俺というところだった。

「別に、ため口でいいよ。ですとか使わないで。」

爽やかに笑うなよ。夕日にお前がぴったりなんだよ。その笑顔。
というより、俺はこいつに惚れてもない。だって、男だぜ？

「うん。」

緊張するな。そついやあ、— United Kingdomの意味を聞くかな。

ユナイテッドキングダム

「あのお、United Kingdomってどこの国？」
また、ほほ笑む。

「イギリスのことだよ。ちなみに、この制服、イギリス産だから。」
そつだよ。だから聞いたんだ。

「すごいね。ヨーロッパ産。」
おもわず口にしたってしまった。

「え？ふつうじゃない？」

あゝあ。事情を話すしかないか。

そんでもって、俺は・・・私はいままでの事情を全部言った。
男ということは言っていないが。

「へ〜。」

「誰にも言わないですよ？」

「大丈夫。さて、お風呂でもはいつてくるか。俺はだいたいこの仕切りをあけてるから、結構ここにはいるんだ。」

「じゃ、私もはいつてくるね。」

ニコつと笑ってやった。

風呂・・・か。

一人部屋に選んだ理由はこれだね。

女子が一緒に、片方の女子が風呂に入ってる時、俺はトイレをどつすりゃいい。

別々だと思つてたからさ。その辺は考えなかったけど。

バスタブに湯をはつて待つ。

あつという間に張れるんだよな、こつこつ。
だいたい10分くらいでお湯をとめた。

さつぱりしたところで、外の空気を吸いに、ベランダってか庭？ベ

ランダにでる。

別に、パジャマまで金を費やしたくないからかわなかった。

男物だっていいだろ？

羽雪君の部屋のドアの音がした。

出てきたのは、濡れた羽雪君と似たような色のウェーブした髪でネグリジェといったらいいのか、お嬢様のパジャマを着て、タオルで髪の毛の水分を吸い取るしぐさをしながらでてきた。

その顔は……

ん？

んん？

思わず、声を出してしまった。

「羽……ゆ……き……く……ん？」

羽雪にそっくりだよ！双子？！でも、一人部屋だよね？！
その子はこちらをむいた。

「っ！」

大きく目を開いた。

「世浪さん？てか、君？！」

なぜ、ばれた！

あ……カツラを忘れた……

「なんで?!男なの!？」

と、仕切りまで迫ってくる。

俺はうなずいた。

「てか、女あああ？」

地声がでてしまっても、俺はそこまで低くない。

羽雪の声はやっぱり透き通っていて、音域でいうと、アルトみたいな声だ。

「……ってというか、世浪も男じゃん。」

「っ。」

「丁度いいよ。これ、秘密にすれば、なんとかなる。それで、このしきりを、うちとあんたのそこだけあけて、お互い、別のほうを開けとくの。」

右手の人差し指を立てていう。

「わあっただよ。」

面倒くさそうに了解した。

「でさ、なんで？俺の理由は言わなくてもわかるだろ。」
むすっとした感じでいった。

「男子嫌いを克服するため。」
は？

「あたしさく男子、大っつつっ嫌いなの。」
ためたな、大のあと。

「そんで、もうそろそろ許嫁となんかあるみたいだから、それに備えて。」

「親、何やってんの？」

「バニカっていう洋服のブランドのオーナーとかいろいろいるいろいろってなに？そんだけ金持ちなの？」

「へえ・・・」

「その服、めずらしいね！なんていうの？！」
キラキラさせるな、その目を。

「スウエット・・・」

恥ずかしいな、いろんな意味で。

「動きやすそう！」

ああ、悪かったな！

「さつきさ、自分で貧乏つつつってたじゃん？」

「ああ。」

手を後ろにして聞いてきた。

「女物の私服、あるの？」

微妙だ。一応かったが。

「2、3着・・・かな。」

俺は頭をかきながら言う。

「んじやく、あたしのあげる！今度の休み、大丈夫？」
なんだよ、お嬢様め。

「悪いからいいよ。」

「もつと感謝しろよ。」
ぶすつとかえされた。

「遠慮しないで。」

にこつと男だとおもっていたころの羽雪スマイルと同じだ。
違うわけではないんだが。

「んじやく、今度の土曜ね。」

お嬢様ってこんなしゃべり方なのか？

ですわとか使われても困るがこっちのほうがいいんだが、
疑問ですね。

「悪いな。」

「あ、たぶんさあ。てか絶対、『ご両親、何をやってらっしゃいますの？』とかいわれるぜ？」

『ぜ』ってお嬢様が使っている言葉なのか？

「だからさ。うちの養子ってことでいいよ。親には確認済み。」
ウインクしてきた。

「ここに入った理由いつたらどうなる。」

「たぶん、君、ここにいれなくなると思う。」
どういう意味だ。

「権力つてやつは、こわいよ。」
ボソツと言う彼女だった。

「お互いのことは秘密ね。あたしは男だしあんたは女。携帯もつてるの？」

当たり前のように聞いてくるな。

当たり前前にも庶民でも持っているものを持っていないんだから。

「ねーよ。」

「そっか。じゃあ服をあげるときに、携帯も買いにいこ？」

なんで、そんなによくしてくれるんだ。

天使かよ。

「なんで、俺にそんなによくしてくれるの？」

「堕天使だから。」

「堕天使？」

「翼が途中でやぶれて落ちた天使。」

なんで、俺が。

「高校にたまたま受かって、はいったようなもんじゃん。」
「そっだが。」

「あだし兄妹いないから、兄妹になつてほしいみたいだね。」

「兄？弟？」

「え〜。どっちだろ。」

かわいくほほ笑む。

「・・・兄でいてほしいな・・・」

と聞こえたが明らかではない。

「え？」

「いや、なんでもない。弟かな。でもな〜意外と頼れそっだし。」

にっとう歯を見せてわらう。

「そのうち、わかるんじゃない？」

何か長い睫の下の輝いた瞳に何か隠されているような気がした。

「カツラをかぶると、美少女なんだからさ」

ベランダの仕切りにもたれかかって彼女は言う。

「男子たちを落とせよ？」

は？

「落とすってなんだよ。」

ふふつと笑って口を開いた。

「騙そうよ。せっかくお互い異性になりきってるんだから。男子が女子からされてキュンっとなるしぐさとかわかるでしょ、男子なんだから。」

わりい、まったくわからん。

「わからないって顔してるなあ。上目使いとかあるでしょ。」

「自分が言うからには、お前もやれよ。本当に入学式のときにはみとれたぜ。」

「ちよつと引いたような顔をして、」

「ホモ・・・か？」

「そついやあ、中学時代そんなこといわれたな。違うけど。」

「クラスの女子たちが、『抱き合ってる〜』とかキヤーキヤーいっていたが。」

「違う！てか、美少女がいたら振り向かない!？」

「う〜ん。みとれないよ〜。」

「横目で見るとな！」

「あたしの周りの人、あんたのこといってたよ。」

「なんてさ。」

「あの、『おろしにツインの茶髪、かわいい』って。」

「そうなのか。俺のまわりはお前のことではいっぱいだったが。」

「中学時代、モテたっしょ？」

「どこの域からモテるってのがわからんね。」

「どこの域からがモテるんだ。」

「わからん」

「即答・・・か。」

「月はきれいだね。」

「夜空を見上げて彼女は言う。」

「この仕切りなら、飛び越えられるっしょ。カギ、あけとくから好きな時にはいってね〜。女ってばれちゃったし、困ることはないっしょ。」

「でもね？女の部屋にはいるってことどういう意味かわかってるの？」

「俺も、開けとくから。勝手にはいっていいぞ。」

「笑ながらうなずいてくれた。」

「別に、変なことは考えてない。」

「そついや、お前。」

俺は一つ、大事なことに気が付いた。

「へ？」

首をかしげる。

「男嫌いなんだろう？」

「君は・・・大丈夫・・・」

は？なんで。

さつき、大嫌いの大でためただろう。

「なんでよ。」

「いや、仲良かった男の子とどこか似てるからさ。」

それから、ちよつと不安げな顔をして

「・・・は、いな・けど。」

一部しか聞き取れなかったが、彼女の目の奥に悲しみがうつっていったから何も聞き返さなかった。

「あと、この学校は言葉、厳しいからね。あいさつは『ごきげんよう』。これは絶対。口調は別になんでもいいけど、みんな、『〜ですこと。』とか『〜ですて。』とかが多い。」

「お前も大変な環境で暮らしてきたな。」

「でも、中学までは公立だよ？」

見えね〜。

「このことは秘密だったけど。あ〜もうこんな時間か。じゃあ、お休みね〜。」

「ああ、また明日。この学園の構造がいまいちだから、朝、よろしく頼むわ。」

「はいはい。」

手のひらをこちらに向けて部屋に入っていった。

俺は約束どつり、カギをかけずに部屋に入る。

ああ。夕飯食つてなかったな。

リビングの机には何かおいてある。

気づかなかったが。

これは・・・

ナビじゃね。

この学園のナビ?!

まじか。

とりあえず、タッチ式のナビを操作する。

レストランとかあんのか。

もう、学園ってか商店街だな。

お高いんだろっな。

買えねーよって思ったが。

俺にはこれがあるじゃないか。

制服のポケットの中に入れておいたカード。

これはこの学園内ならこの3年間食糧に関しては使えるというものだ。

俺は、一応庶民だからな。

制服と一緒に送られてきたんだ。

それを持って学園内のレストランへ。

やば、カツラ・・・

とりあえず、どんな服でいこう・・・

買ったやつでいいかな。

私服でいいよね。

そうして、俺は着替えた。

コーデイネートやらなんやらは俺にはまったくわからんから、マネキンのやつを買った。

花柄のひざより上の丈で白、赤、ピンクが主だ。

レースとかがついていて、春らしい服装。

靴は茶色のヒールがついたもの。

パンプスとか言ってたかな。

俺が今から行こうとしているのは、パン屋だ。

結構夜遅くまで、やっていないのだが。
今は9時だ。

11時までその店はやっているという。
俺はとりあえず、パン屋へ向かう。

School Resort (前書き)

だんだん、なんでもありになってきてます。

School Resort

寮を出る。

月がきれいだ。

カツカツと、ヒールをならして寮から出てすぐの看板を見る。

そこには『蘭華峰学園校舎 School Resort』と
かいてあった。

「スクール・・・リゾート・・・」

想像はできていた。

あれだろ、きつとよ。プールとか、下手したらキャンプ場みたいな
場所もあるんじゃない？

パン屋はそんなかに入っているだろうと思った。

その方向を見渡す。

見渡さなくてもわかるか。

でっかい門があるんだ。

そこには、でっかく『School Resort』とかいてあっ
た。

というか、彫られていた。

門は俺の身長の2倍くらいはあり、かなりでかかった。

門番らしき人もいて、入る許可をもらうために聞いてみた。

「あの・・・買いたい物がありますが・・・」

門番らしき人は

「この学校の生徒だという証明をもってらっしゃいますか？生徒手
帳とか。」

明日、配られるんだよな。

「こ、これじゃだめですか？」

俺はそういって、食べ物だけを無料で買えるカードを見せた。

よく見たら、『Gold Food Card』と書いてあり、ベ
ースは金色だ。

名前も彫られてあり、『Reki Yonami』とかいてある。
リッチな気分すね。

「そしたら、これを持ってあの建物の中にはいってください。」
門をのぞくと、さらにでっかい建物があった。
門を手動で開いてくれた。

ここが本物の門かよ。

門から入ると、まず噴水がある。
結構でかいものだ。

「おお・・・」

声をおもわずもらしてしまつぐらいにすばらしいものだった。
ライトアップがさらに高級感をだしていた。

さつそく中へはいる。

案内人的な人に聞いてみた。

「中に入りたいのですが・・・」

「では、あちらでカードを発行なさってください。」

案内されたのは受付だった。

「カードを作りたいのですが・・・」

「では、こちらに記入をお願いいたします。」

そこには、名前、性別、出身国、寮番号、クラスなどをかくところ
がさまざまであった。

性別ではもちろん、『女』に丸を付ける。

「次に、学園生徒と承認できるようなものはお持ちですか？」
さっきのカードを見せた。

「ありがとうございます。では、カードはこちらになります。次回
からは、そちらのゲートよりお入りください。」

受付人の指の方向を見ると、さらに、門があった。
どんだけや。

門を通る。

本当に、すごいな・・・

ライトアップとか、いくつかの門があり、中央には噴水。

門の上には、一番最初の入り口と同じで彫られていた。

『Sports』^{スポーツ} 『Food』(食べ物) 『Fashion』
『Interior』(家具) 『Accessories』^{アクセサリー} 『Sundries』(雑貨) 『Flowers』(園芸) 『と7
つの門があった。

すごいな。まじで。

たぶん、食べ物ゲートを通ればいいんだろ？

通ろうとした瞬間、

「姉ちゃん、遊ばね？」

何人かのヤンキーらしき奴に声をかけられた。

ああ・・・金持ちなのか・・・？

どうすればいいんだろ。

断ると・・・てか、キレるととまらなくなっちゃうし。

「結構です。」

「いいじゃん。」

しつけーな。

女だと思ってるな。完全に。

「そういうこと、するくらい暇なんだね。」

と、声をかけてくれたのは、

「羽雪っ」

ニツと歯を見せて笑う少年・・・少女はさつきとは全く別人の美少年にかわっていた。

おやすみって言ってなかったっけ？

「お前、誰だよ。」

「羽雪というが？」

本当に、かっこいいよな。

「おい、あの羽雪だぞ?!」

ボスらしき人に付き添いが言う。

「だからなんだ、この女には関係ないだ・・・」

「関係なくない。こいつは俺んちの養子だ。」

お・・・おう。

ヤンキーたちは行こうぜと言って去って行った。

「大丈夫？」

「大丈夫に決まってる・・・」

「シーツ。二人以外のときは女だろ？」

人差し指を俺の口に当ててきた。

なんか、すごくドキドキする。

胸がキュっとなるみたいだ。

「るさいっ。」

ははっと爽やかに笑う羽雪。

「でも、ありがと。」

と、ほほ笑んでやった。

「ここは、いろんな人が通るから。会員証さい作れば誰だって通れる。ほら、一番最初のでっかい門を通る前、寮から来た道ともう一個道があつたと思うんだ。」

全然気づかなかつた。

「そこが、一般の人がここに来れる方法なんだ。夏とか、プールが開かれたりするからな。室内プールもあるぞ」

入れません。一般人以下に金がないんす。

「てか、寝るんじゃなかったの？」

「そついえば、夕飯食うの忘れてな。」

「どこいくの？」

「どこでもいいや。世浪は？」

「パン屋だよ。」

「じゃあ、俺もそつする〜」

可愛く笑う羽雪。

Foodという門を潜り抜ける。

そして、いろんなものがある中、パン屋を選ぶ。

「おいしそう。」

うまそう、と言いたかったが、怒られるからな。。

「だな。俺、これにしよつと。」

と行って、チョコパンを選んでいった。

「ん〜。迷うな〜。」

そこへ、羽雪が近づいて、

「これでいいじゃん。」

と行って、俺のお盆に羽の絵がチョコペンで書かれたパンをのせてくれた。

「墮天使の麗輝ちゃん。」

下の名前で呼ばれたときにドキッと大きく心臓が一回鳴った。

思わず、下を向いてしまった。

「気に入らなかった？」

「ううん！違う。これにするね。」

そう行って、レジへと持って行った。

「俺、帰るわ。世浪は？」

「帰るよ。」

「じゃあ、一緒に帰ろうか。」

そう言って、SchoolResortを背に向けて歩いた。

「今度こそ、おやすみな。」

「うん。」

と行って、同時にドアを閉めた。

俺は、部屋に入った瞬間にカツラを脱いだ。

「あ〜あつ。夏どうすんのこれ。」

そう行って、カツラを脱ぎ捨てた女装の姿であぐらをかき、さっき

のパンをかじった。

うまっ。

うますぎだろ。

なんか、クリームが挟まっていて。

おいしい・・・

妹はどうかな・・・

瑠^る姫・・・元気かな。

あんだだけ嫌いな妹でも恋しくなる。

離れるって怖いな。

今度、帰ってやろう。

クラスメイト（前書き）

クラス替えて好きな人と同じクラスになる方法。

1 カ月前くらいから気づいたらずっとその人の名前、同じクラス、
を何回も繰り返し返す。

これだけ。

自分はこれで、違うクラスになったことはありません。

七夜（作者）。

クラスメイト

コンコン。

俺は、登校の準備はできていた。

バッグは中学のころのスクールバッグ。

その、ノックしたやつは・・・

羽雪だ。

「おはよ。」

よっと手をこちらに見せる。

にこつとほほ笑んだ俺。

「そついやあ、なんて呼んだらいい？麗輝^{れき}？世浪？」

中学時代、世浪としかよばれていなかった。

「なんでもいいよ。」

「じゃあ、麗輝^{れき}ってよぼうか？」

なんか、照れる。

「じゃあ、なんていえばいいの？君のこと。」

「いいよ、なんでも。」

「同じ答えじゃん。」

「羅音^{らおん}って呼ぶか？」

こいつが女とは思えない。

きれいでさっぱりしていて、爽やかな。

俺らは昨日の、スクールリゾートへの道と逆方向へ歩いた。見るからにでっかい校舎がたっている。

入学式に通った校門とは逆の『寮側校門』と呼ばれる校門から入った。

周りの女子は、羽雪の方を見ている。

注目の的だな。

女だけだ。

「1年B組ってどこ？」

俺は羽雪に尋ねた。

「ああ。」

入った瞬間、羽雪は女子に囲まれた。

俺はその場を遠ざけるために避けた。

避けるの成功。

「世浪っていうんだ。」

うわ。

金持ちってなんなの？ いったい。

いかにも染めたような金髪のスカートをめちやくちや短い丈にした

奴に話しかけられた。

「あつ・・・うん。」

「親、何やってんの？」

・・・

「親っていうか・・・私、養子・・・だし・・・」

「へえ。どこの。」

少しは気いつかえや！

「あの人の家の・・・」

と行って、羽雪の方に指を指した。

「ちよつと！ あの人、バニカの社長の子じゃん！」

そんなすごいのか、バニカっブランドは。

「そうみたいね。」

「当たり前のように言うなよ。」

チッ

心の中で舌打ちをした。

「ちよつとまって！」

待ってるよ、さっきから。

「しかも、超美形！」

とって、俺をおいていった。

てか、こっちからお断りだ。

「はあ。」

ため息をついてしまった。

羽雪を見ると、ニコツと笑ってくれた。

ドキッ

一回だけ心臓が大きく鳴った。

ちょっとだけ、遊んでみつか。

まだ、ホームルームはじまんないみたいだし。

「羅音？」

「どした、麗輝。」

周りの女子がひそひそ話をはじめ。

「何時から、はじまるの？ホームルーム。」

「もうすぐだよ。」

ニコツと彼はほほ笑んだ。

「羽雪君、この子だれ？」

睨みつけてくる。

女ってこえーな。

まっ、俺から仕掛けたんだけど。

「俺んちの養子。」

さらに、ざわめく。

「みえないわ。」

ホホホホと笑う彼女に対してさっき俺に話しかけてきたギャルが口を開いた。

「だからなんだよ。お前だって、社長令嬢には見えないが？」
意外といいやつだ。

「チツ。なんですの？貴方こそ、この学校にふさわしくなくてよ。」
と言われた瞬間に……

彼女は自分の髪の毛を引っ張った。

ここにもいた。カツラをかぶった高校生。

他にもいるんじゃないのか？

いっそ、全員の髪の毛ひっぱるか？

「誰だかわかる？」

さつきはわからなかったが、すらっとした背の高い身長。

抜群のスタイル。

この条件で何をやってるかなんてわからないやつはいないと思う。

カツラをはずしたら、確かに金髪ではあったが、さつきのようなかにも染めたようではなく、自然な感じの金髪だった。

「久しぶり、羅音ちゃん。」

ちゃん……ってことは、女ってことを知ってるのか？

「前よりずいぶん男前になったね！さつき、この子からも聞いたけど……」

と、笑った口で横目で俺を見てきた。

「養子なんだってね。初耳だわ。」

周りは、

「あの子、北常愛奈（北へんじょうあいな）じゃないの？」

北常……愛……

あつ。

「あのモデルの？」

俺でもわかる。

妹が大ファンだからな。

いつも、一緒に飯を食う時、

『愛奈ちゃんの服、すっごく可愛くてね。』

とか、めっちゃ言ってたな。

「羅音さあ、教えてよ、こんなかわいい子が彼女だなんて。」

「彼女じゃねえよ。」

これも、ジョークというものだろうか？

「世浪ちゃん、初めまして。北常愛奈です。」

俺より断然、背が高い。

「初めましてっ。世浪 麗輝です。」

「めずらしい名前だね、下の名前なんて書くの？」

興味深そうに尋ねてきた。

「『うるわしく、かがやく』で、麗輝です。」

「タメでいいよ。」

だってよう。

セレブ様に話しかけられたらタメじゃだめだよ。

「愛奈って呼んで。ちゃんとかはいらないよ。あたしは麗輝って呼

ぶし。」

いい子じゃねえか。

「うん。」

「羅音。少し見ない間に、背、伸びた！」

「っ。一応、平均以上なんだよ。」

気にしているように言った。

「だって、麗輝と同じくらいじゃん。」

「ぶっ。」

ぶって何？！

低くて悪いな！

「お前が高いだけだろ？」

からかい半分に言った。

でも、羽雪が女っていうと、女にしか見えなくなってくるんだよな

。

だから、俺には、女子同士の会話にしか見えなくてわけ。

愛奈ってやつあ、羅音が女ってわかってんのか？
先生が入ってきた。

羅音のまわりの女子たちも、みんな席に一齐に座った。
俺は出席番号20番だから、一番端っこの後ろの席だ。

「出席確認をする。」

やっと終わった。

40人は結構多いな。

そして、担任の話が終わり。

北常がこっちに来た。

「羅音ってかわいいよね。」

俺の机に肘をつけて羽雪のほうを見た。

「あたしさ。この前の春休みの撮影で『バニカ』の服で撮影だったんだ。」

こくりとうなずいた。

「もしかして、羅音のこと好き？」

そしたら、真っ赤になって

「好きってか・・・」

ほほう？

「弟・・・みたいなの・・・」

「好きなんでしょ？」

目をかがやせて言ってみた。

「うん・・・」

こいつ、男っておもっとるな。

「そっか。」

「言わないでよ？」

言えるか、バカ。

「大丈夫だって。」

「でもさ、羅音って、モテるじゃん？」

羽雪のほうを見ると、キヤーキヤー言われてる。

「だからさ、かないっこないんだって。
そりゃあなあ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5071t/>

墮天使は男の娘

2011年6月21日12時33分発行